

「適疎」で「利他」の心をもつ地域

全世界に甚大な影響を及ぼしている新型コロナウイルス感染症ですが、同時にそれぞれの国や地域における社会経済の課題も浮き彫りにしています。我が国でも、コロナ禍により「過度なグローバリズムの進行」や「一向に是正されない東京一極集中」の問題などが浮かび上がっています。

そんな中、「適疎」という言葉を久しぶりに聞きました。コロナ禍終息後の社会の在り方を象徴するキーワードとして、コミュニティ・デザイナーの山崎亮氏が掲げていました。「適疎」という言葉を私が初めて聞いたのは、二十数年前、北海道で地域振興室長を務めていた時です。道議会ではしばしば過疎対策が取り上げられ、その中で、「「過疎」と言うからマイナスイメージがあるのであって、「快適な疎」、つまり「適疎」な空間として地方都市をとらえ直すべきだ」と言う議論があり、「なるほど」と合点したことを覚えています。

アフターコロナの社会におけるもう一つのキーワードとして、気になっているのは、「利他」という考え方です。3年前に感染症の大流行を予測していたジャック・アタリ氏というフランスの哲学者が『利他主義』の理想への転換こそが人類のサバイバル(生き残り)の鍵である」と発言しています。「利他」といえば、私はアンパンマンを思い出します。原作者で高知出身の故やなせたかしさんは、「人生の楽しみの中で最高のものは、やはり人を喜ばせることでしょう。」と語っています。アンパンマンはお腹が減って泣いている子を見つけると顔の一部を与えます。自らが傷ついても目の前の人を見捨てることはしません。四国遍路のお接待の心にも通じる、そんな「利他」の心がアフターコロナの社会の維持の鍵になるというのです。

今年、アンパンマン列車の運行20周年。赤色と黄色の真新しい車輦がお目見えし、7月から四国内を元気に走っています。この地、四国の地方都市はまさに「適疎」で「利他」の心をもつ地域。これからが定番であると期待したいと思います。



「土讃線あかい・きいろいアンパンマン列車」(運転区間:岡山~高知)